



# チッチとミーコ



詩風エッセイ集

皆岡 樹史

---





# 目次

チッチとミーコ	
猫にふられる理由 . . . . .	3
縁側の猫 . . . . .	4
チッチとミーコ . . . . .	5
ああ、寒い . . . . .	7
お猫のブルース . . . . .	8
コーヒーのカンカン . . . . .	10
イメージ . . . . .	11
耳がきつい . . . . .	12
コロとタマ . . . . .	13
こんにちはー . . . . .	15
猫に好かれない日 . . . . .	16
コンビニのネコ . . . . .	17
したたかなインコ . . . . .	18
猫ストレス . . . . .	20
ふわふわと . . . . .	21
ベンチネコ . . . . .	22
猫が鳴いている . . . . .	23
ライバル . . . . .	24
嘘つき . . . . .	26
現状ラブソング . . . . .	28
腰を振る . . . . .	29
自信を持って . . . . .	31
取引先のノラ猫 . . . . .	32
首根っこ . . . . .	34
笑う猫 . . . . .	35
深夜 . . . . .	37
猫の . . . . .	38
猫の本能 . . . . .	39
鳴き声 . . . . .	40

奥付

..... 43

チッチとミーコ



## 猫にふられる理由

猫は本能で生きている動物だから  
自分の行動に理屈をつけることをしない。  
行動に理屈をつけることをしないから  
のんびりと人生を考えることもない。  
人生を考えることがないということは  
裏返せばそんな暇はないということになる。

つまり猫はその時その時の行動に  
人生のすべてを賭けているわけで  
だから今日はこのくらいにしておこう  
などと言って手抜きをすることもなければ  
やろうかな、どうしようかな  
などという優柔不断な行動をとることもない。

猫はすべてに真剣勝負なわけだから  
「猫は本能で生きている動物だから  
自分の行動に理屈をつけることをしない…」  
などと勝手に猫の人生を考えているような  
暇な人間を相手にする暇を  
持ち合わせてはいない。

## 縁側の猫

カラコロという音がすると  
縁側で寝ている猫が  
首をもたげて「ニャー」と鳴く。  
「何でこの猫は  
下駄の音に反応するんだ？」  
「それは幼い頃に  
下駄で尻尾を踏まれたからだよ」  
「なるほど。それでこの猫の  
尻尾の先は曲がっているんだ」  
「あー、触っちゃダメだよ」  
「何で？ もう痛みなんて  
とっくに引いているはずだろ」  
「そうじゃない。この猫は今でも  
尻尾のことで恨みを持っているんだ」  
「えっ。恨みって、猫が？」  
「そうだ。だから尻尾を触られると  
下駄に踏まれた昔を思い出して  
恨みを晴らそうとするんだ」  
「まさか取り憑くわけじゃないだろうな」  
「そのまさかだ。こいつももう高齢だ。  
もし取り憑いたら大変なことになるぞ。  
そっとしておけ、そっと…」  
外からは相変わらず  
カラコロと下駄の音がする。  
縁側の猫は相変わらず  
首をもたげて「ニャー」と鳴く。



## チッチとミーコ

日が暮れてしばらくすると  
あいつが黒い箱からゆっくり  
ゆっくり降りてくる。そして  
おれを見つけると、決まって  
『チッチ』と舌打ちしやがる。

舌打ちをした後あいつは決まって  
『ミーコ』と言っている。どうやら  
おれに付けた名前のような。  
だけど、おれはおれであって  
ミーコではない。絶対違う！

だけど何でおれがミーコなんだ。  
ミーコ顔でもしてるんだろうか。  
そんなヘンテコな名前はやめてくれ。  
付けるならもっと気の利いた  
英語の名前を付けてくれよ。

しかしこのままでは悔しいな。  
そうだ、おれもあいつに変な  
名前を付けてやろうじゃないか。  
何にしようかな。やっぱり  
チッチと言うからチッチがいい。

あ、チッチが帰ってきた。  
いかん！ 見つかってしまった。  
『ミーコ、ミーコ』と近づいてくる。  
「馬鹿チッチ、糞チッチ。どっか行け。  
ミーコなんて二度と呼ぶな！」

おれは声に出して言った。  
間違いなくチッチは馬鹿だ。

おれの言うことがわかってない。  
あっそこまで来た。わっ満面の笑みだ。  
「失せろチッチ。気持ち悪い！！」

ああ、寒い

街がどこかに流れて行く  
街がどこかに流れて行く  
お前の夢の場所はここじゃない  
お前の行き着く先はここじゃない  
そうつぶやきながら  
街がどこかに流れて行く

街がこんなにちんけだから  
街がこんなにちんけだから  
癒やしてくれる猫さえも  
いなくなったじゃないか  
おかげで人も減ったじゃないか  
街がこんなにちんけだから

華やかな彩りのネオンは  
見た目だけのイルミネーションに変わり  
温かさのなくなった街を映し出す  
夢も見られなくなった街を映し出す。  
青と白だけの無機質な  
寂しい街を映し出す

街はきっと凍えているんだ  
街はきっと凍えているんだ  
あの時の夢はいつか終わったんだ  
だから今は現実の生活に思いを馳せるんだ  
気がつかないうちに気温が少し下がったんだ  
だから街が凍えているんだ

## お猫のブルース

お猫にとって人間というのは  
迷惑極まりない存在なのである。  
だから空腹時以外の飼いお猫は  
人間に近寄ってこないし  
いついかなる時も野良お猫は  
人間には近寄ってこない。

いったん人間に捕まると面倒だ。  
のどをなでるし、鼻を押すし  
肉球を触るし、腹をさするし  
尻尾をつかむし、フラッシュたくし、  
すぐに抱き抱えようとするし  
好き勝手な名前で呼ぶし..

お猫が必要としているのは  
誰にも邪魔されずに  
ゆっくり寝られる時間だ。  
お猫が必要としているのは  
誰にも干渉されずに  
のんびり出来る空間だ。

だからオモチャ扱いにして  
時間や空間を邪魔してくる  
人間の子供を嫌うのだ。  
だからいつもジッとしていて  
時間や空間に干渉してこない  
年寄りのそばが好きなのだ。

お猫にとって人間というのは  
実に鬱陶しい存在なのである。  
だから空腹時以外の飼い猫は  
人間に近寄ってこないし

いついかなる時も野良猫は  
人間には近寄ってこない。

## コーヒーのカンカン

駐車場の白い線の上に  
コーヒーの缶が置いてある。  
誰が置いたのかは知らないが  
ご丁寧に真っ直ぐに立てている。  
思うに、缶を投げ捨てないあなたは  
缶を投げ捨てない程のいい人なんだ。  
そんなにいい人なんだから  
そこを歩く猫がつまずかないためにも  
もう一步だけいい人になって  
ゴミ捨てに捨ててきて下さいな。

## イメージ

うちの駐車場に数匹のネコがいる。  
ペット禁止のマンションなので  
もちろん彼らはノラである。  
誰も餌を与えてないはずなのに  
彼らは一様に人懐っこい。  
そこに住んでいる常連さんはもちろん  
営業でやって来る一見さんを見ても  
逃げようとはしない。  
きっと何かを期待して  
愛想を振りまいているのだろう。

さてそんな数匹のネコは  
肥ったヤツや痩せたヤツ  
中肉中背まで揃っている。  
同じ食生活をしているはずなのに  
この差は一体何なのだろう。  
もしかしたら肥ったヤツは  
引き寄せの法則だとか  
宇宙にお願いだとかを知っていて  
餌をたんまり食べている自分を  
イメージしているのかもしれないな。

## 耳がきつい

やつは時々  
おれの耳の後ろに  
指を持ってくる。  
気配を感じておれの耳は  
ピクピクピク。動く動く。

やつはそれを見て  
おれの耳の後ろに  
またしかけてくる。  
気配を感じておれの耳は  
ピクピクピク。動く動く。

やつはしばらくして  
おれの耳の後ろに  
またまたしかけてくる。  
気配を感じておれの耳は  
ピクピクピク。動く動く。

やつはもしかしたら  
おれの耳のピクピクを  
楽しんでいるんじゃないだろうか。  
おれの耳は見せもんじゃないぞ。  
ヤメロヤメロ。耳がきつい！



## コロとタマ

小学校二年生の頃  
近くにコロという犬がいて  
よくぼくの家遊びに来ていた。  
とりあえず家の前に座って  
愛想よく尻尾を振っていたが  
彼の魂胆は見え見えで  
確実に餌をねだりに来ていたのだ。  
そこで給食のパンの残りを  
あげていたのだが  
彼はそれを食べ終わると  
それまでの愛想のよさを一変させ  
振り向きもせずに  
無愛想に帰って行った。

同じく小学校二年生の頃  
近くにタマという猫がいて  
よくぼくの家遊びに来ていた。  
別に餌をねだるわけではなく  
いたずらをするわけではなく  
家の前に行儀よく座って  
「ミャー」とぼくを呼んだ。  
ぼくが顔を見せても  
別に喜んだふうではなかったが  
彼女はぼくの顔を見るのが  
日課だったようで  
しばらくすると「ミャ」と言って  
満足そうに帰って行った。

ぼくの記憶の中では、この二匹が  
同時に登場したことはない。  
いつも交互に来ていた。  
最初は生き物はかわいいな

程度の意識しかなかったが  
長くつきあっていくうちに  
二匹の差が現れた。  
行儀の良いタマの存在があるせいで  
コロの態度の悪さが  
目につくようになったのだ。  
そのうち「犬は好かん」  
という意識が芽生え、徐々に  
コロとの距離を置くようになった。

ある時こういうことがあった。  
ぼくが大切にしていたオバQのグッズを  
コロはぼくの手から取り上げ  
グチャグチャに噛んでしまった。  
それまでの経緯もあって、ぼくは  
コロを許すことが出来なかった。  
ぼくは思わずコロの頭を叩きつけた。  
その日を最後にコロは来なくなった。

一方のタマは相変わらずだった。  
雨の日も風の日も  
ぼくの顔を見に来ていた。  
だがその翌年、突然来なくなった。  
飼い主にその事情を聞いてみると  
「突然いなくなった。おそらくどこかで  
死んでいるんだろう」ということだった。  
以来ぼくの家には動物は来なくなった。

ま、それはそれでいいのだが  
この二匹のおかげで  
一つだけ決定的になったことがある。  
それは犬が大嫌いになり  
猫が大好きになったということだ。  
後日親戚が犬を飼うようになるのだが  
いちおうかわいがってはいたものの  
好きにはなれなかった。

こんにちはー

「こんにちはー」  
威勢よく親戚の家の玄関を開けると  
真っ先に出てくるのはいつも猫だ。  
小さな子供のいる家に行くと  
真っ先に出てくるのがその子供  
というのと同じだ。  
結局、年を取っても猫の知能程度は  
人間の幼児と同じくらいなのだろう。  
しかし猫が出てくる時、柱の陰から  
こそーっと覗き込む姿には笑ってしまう。  
目が合うと目をそらし、他の所を見る。  
で、こちらが知らん顔をしていると  
またこそーっとこちらを覗き込む。  
そこで再び目を合わせてやると  
慌てて他の場所に目をやる。きっと  
自分が目をそらせば、自分の姿が相手に  
見えなくなるとでも思っているのだろう。  
その行為が実に愛くるしい。

## 猫に好かれない日

自他共に認める猫好きではある。  
だが、猫を飼うほどの甲斐性を  
ぼくは持ち合わせてはいない。  
猫の方もそれを察しているのか  
ぼくの猫可愛がりに対して  
曖昧にグルグル言うだけで  
心からの愛情表現をしてこない。

ノラなんかは特に敏感で、きっと  
「こいつに媚びを売っても、何の  
得もない」とでも思っているのだろう。  
「チ、チ、チ」と呼んでも  
立ち止まろうともしない。  
今日なんかは偉そうに、「フー」  
などと威嚇してくるヤツもいた。

まあ、眺めているだけでも  
充分に楽しめるヤツらではある。  
しかしせっかく、せっかく  
同じ場所にいるのだから  
少しは袖触れ合ったって  
少しは会話があったって  
いいじゃないか。

ぼくはいつもヤツらに  
そのへんを察してもらいたいのだ。  
少しは心を開いてほしいのだ・  
まあ、今日のことは許してやろう。  
だけど次回だけは餌を持っていても  
やらんからな。とりあえずそれを  
今日のバツということにしておくぞ。

## コンビニのネコ

何ゆえに舌を鳴らして起こすですか。  
何ゆえに鼻先に指を持って来るですか。  
何ゆえに汚い手で頭を触るですか。  
何ゆえに指先で首をくすぐるですか。  
何ゆえに勝手に肉球を押さえるですか。  
せっかくいい気持ちで寝ているのに  
食べ物くれんのなら  
やめてくれんですか、鬱陶しい…  
「ニャー」

## したたかなインコ

小学校二年生の頃、ぼくの家には  
デブという名のメスのインコがいた。  
親戚からもらった鳥だった。  
当初はつがいで飼っていた。  
二羽は仲がよさそうに見えたのだが  
実はそこには愛情なんかなく  
体が大きく、意地の悪いデブが  
相方を支配していた。そのうち  
デブは餌を独占するようになった。  
ある朝起きると鳥かごの底に  
冷たく固まった相方の死骸が  
落ちていた。意地の悪いデブは  
鳥かごという小さな世界での  
生存競争に勝ったわけだ。  
勝ち誇ったデブは相方の死を  
屁とも思わなかったのか  
涼しげな顔をして歌をうたっていた。

その後一羽になってしまったデブは  
さすがに寂しくなったのだろう  
人に媚びを売るようになった。  
ところがそれはデブの作戦だった。  
人になついたふりをするので  
鳥かごから出してもらえるようになる。  
そこで逃げなければ人は油断し  
家の中だけではなく  
外への出入りも自由になる。  
ある日デブは計画を実行した。  
叔母が洗濯物を干している隙に  
デブは外に出て、そのまま  
ピーと言って飛んで行ってしまった。  
そして、もう二度と帰ってこなかった。

それからおよそ三十年後に、再び  
インコを飼うようになったのだが  
その時も同じような経緯で  
インコを逃がしてしまった。  
きっとうちはペットに縁がないのだろう。

## 猫ストレス

実家の駐車場に数匹の  
野良猫が棲みついている。  
野良とは言いながらも  
栄養は行き届いているようで  
どの猫もわりと肥えている。  
昼間彼らは物陰に隠れて  
人と交わることで起きる  
ストレスから身を守っている。  
ところが隠れ方が下手なのか  
いつも子供たちから追われている。  
ふー、にゃにゃおーん。

彼らの一日は夜始まる。  
始まると言っても何匹かが  
駐車場に集まるだけの話で  
彼らは何もせず静かに座っている。  
ただ好き勝手に座っているのではなく  
各々が適当な距離を置いている。  
他の猫と交わることで起きる  
ストレスから身を守っているのだ。  
そうすることで干渉を避けている。  
なのにいつもケンカをしている。  
ふー、にゃにゃおーん。



## ふわふわと

何のリズムに合わせているのか  
ふわふわと歩くネコがいます  
時折そこに立ち止まっては  
ふわふわと浮かぶトンボを  
じいっとじっと見えています  
白い雲が流れています  
心地よい風が吹いています  
きときとこのネコの  
汗もしっかりぬぐっています

## ベンチネコ

あっ、また二本足が来た。  
今度は白い髪のおっさんだ。  
奴らはオレの姿を見ると  
なぜか襲いかかってくるんだ。  
若い女は「キャー、キャー」と  
甲高い声をあげて襲ってくるし  
バアさんは「チッチッチ」と  
舌を鳴らして襲ってくる。  
ガキまでもがオレを見ると  
大声を上げて襲いかかろうとする。  
一度ガキから尻尾をつかまれて  
往生したことがある。  
オレが何をしたというんだ。  
何もしてないじゃないか。  
オレはただこのベンチに  
座っているだけなんだ。  
そのことで二本足たちに  
迷惑をかけた覚えなんかない。  
久しぶりのポカポカ陽気なのに  
寝入りばなを襲ってくるので  
ゆっくり昼寝もできないじゃないか。

## 猫が鳴いている

猫が鳴いている

猫が鳴いている

今日の区切りを告げた寂しさか

届かぬ恋のいらだちか

実らぬ夢のむなしさか

彼らの一日は夜始まる

彼らの一日は夜始まる

## ライバル

ぼくが中学生の頃  
親戚にクリという犬がいた。  
横須賀の久里浜生まれということで  
その名をつけられたのだった。  
お米屋さんやガス屋さんを噛みつくわ  
そのくせ不審者が来ても吠えないわ  
まったく役に立たないアホな犬だった。  
ただ子作りだけは励んでいたようで  
彼の死後、親戚の家の周りで  
クリによく似た犬を  
ぼくは何匹も見ることがある。

ぼくが高校生を卒業する頃  
その親戚がロクという猫をもらってきた。  
鎖につながれた生活を強いられ  
運動不足になっていたらしく  
自分の首を搔く足が空振りするほど  
丸々と肥えていた。  
人に飼われていたくせに人に懐かなかった。  
もしかしたら自分の飼い主はあくまでも  
自分を鎖につないだ前の飼い主であり  
自由にしてくれた親戚は、自分の中の  
飼い主ではなかったのかもしれない。

ロクとクリはすこぶる仲が悪かった。  
ロクは親戚に住むようになってから  
鎖でつながれることもなく  
家の内外でのびのびと暮らしていた。  
一方のクリは人を噛むので  
庭の隅に鎖でつながれていた。

クリはその待遇の差が気に入らなかった。

が、そのことを飼い主に訴えることも出来ず  
そのストレスのはけ口をロクに向けていた。  
とにかくロクの姿を見るとクリは  
気が狂ったように吠えまくった。

ロクはというと、そんなクリの感情を  
逆なですることばかりやっていた。  
クリの目につく所に座ってみたり  
クリの耳に届く所で猫なで声を上げてみたり  
クリの目の前で飼い主に抱かれてみたり…。  
とにかくクリに意地悪しているとしか  
思えないような行動をロクは取っていた。

ぼくが二十歳を過ぎた頃  
ロクは親戚宅には住んでいなかった。  
どうやら家出したらしい。  
案外クリの存在がストレスになっていて  
それが原因の家出だったのかもしれない。  
一方のクリはというと  
そのストレスの原因が取り除かれたことで  
安心したのだろう、それから数年生きていた。

## 嘘つき

男は

絶対に浮気はしません

という嘘をつく

女は

絶対に嘘をつきません

という嘘をつく

喫煙家は

もうタバコは吸いません

という嘘をつく

二日酔い野郎は

二度と酒は飲みません

という嘘をつく

子供は

絶対に勉強します

という嘘をつく

年寄り

わたしが若かった頃は

という嘘をつく

政治家は

絶対に生活を保障します

という嘘をつく

宗教家は

絶対に幸せになりますよ

という嘘をつく

サラリーマンは  
絶対に目標を達成させます  
という嘘をつく

犬は  
絶対に服従します  
という嘘をつく

猫は  
あっち向いて「ニャー」  
という嘘をつく

## 現状ラブソング

世の中には実に多くの猫がいるんだから  
そのスペースを空けておかねばならない。  
いくら人間のほうが多いからといっても  
寝返りを打てないほどにスペースを  
使い切っているわけじゃないんだから  
車が入り込めない駐車場の隅っこや  
人が利用しない公園のベンチの下に  
猫たちのスペースを作っておくべきだ。  
更に猫には決して干渉してならない。  
猫が猫であるためにこれは必要なことだ。  
世の中には実に多くの猫がいるんだからね。



## 腰を振る

犬がぼくの膝に絡みつ  
しきりに腰を振っている。  
振り払っても、振り払っても  
ぼくの間を狙っては  
シッポ振り振り寄ってきて  
膝に絡みついてくる。  
おいおい、やめんか。  
こんな膝で腰を振っても  
子孫繁栄なんて出来ないぞ。  
いや、彼らの中には  
子供繁栄のために腰を振るとい  
意識なんか無いに違いない。  
彼らが腰を振るのは、きっと  
彼らの「生」のプログラムの中  
腰振りが含まれているからなのだ。  
だから飽きずに腰を振ってられるのだ。

ところで犬は、快楽のために  
腰を振っているのだろうか。  
それとも苦痛を解消するために  
腰を振っているのだろうか。  
もし苦痛を解消するためだとしたら  
その苦痛というのは  
体液が溜まるがために起きる  
膨張感という肉体的な苦痛だろうか。  
快楽を知ったがために起きる  
モヤモヤという精神的な苦痛だろうか。  
それともその両方だろうか。  
ぼくはそういうことに興味を抱く。  
犬はぼくの膝に興味を抱く。  
いや実際ぼくの膝を抱いている。  
いいかげんにしてほしい・・・。



## 自信を持って

ふと気づくと悩んでいる。  
いったい何を悩んでいるのかというと  
それがまたどうでもいいことで  
すでに終わっていることだとか  
今つぶやいた独り言だとか  
まだ来ぬ先のことだとか。  
つまりは無駄に悩んでいるわけだ。  
こんなことばかりやっているから  
猫から「退けよ、おっさん」  
って顔されるんだ。  
鳥から「これでも喰らえ」  
って糞かけられるんだ。  
それがまた悩みの種になる。  
もう少し自信を持って  
生きんといかんです。

## 取引先のノラ猫

取引先の駐車場に  
数匹のノラ猫がいる。  
フサフサとした  
気持ちよさそうな  
毛並みをしているのだが、  
そこはノラなので  
かなりすすけている。  
その汚れ方からすると、  
体に棲みついている  
のみやダニの数は半端ではなく、  
かなり痒い、痒い痒い人生を  
彼らは過ごしているに違いない。

さて、そのノラたち、  
別に取引先の人が  
飼っているわけではない。  
餌を与えているわけでもない。  
だから人間には近寄ってこない。  
とはいえ、人を見かけても、  
人慣れしていないノラのように  
ダッシュで逃げることはしない。  
適当な距離を保っては  
ジッとこちらを窺っている。  
こちらが少し近づいても  
逃げようとはしない。かといって  
体を触らせることはしない。  
ま、その汚さを見たら  
痒さがうつりそうで  
触る気も失せてしまうが。

ぼくは彼らと会った時は  
とりあえずチチチと呼んで

彼らが足を止めたら  
下手な猫語で語り  
適当ににらめっこして、  
時には写メに収めて、  
それで終わりにするという  
適度に迷惑な人間を演じている。

## 首根っこ

首根っこをつかまされると  
私は何も出来なくなる。  
だから彼の姿を見つけたら  
私は一目散に逃げている。  
そう彼は私の首根っこを  
つかむのが上手なんだ。  
息を殺して黙っていても  
彼は私に気づいてしまう。  
車の影に隠れていても  
彼は私を見つけてしまう。  
そしてしつこくしつこく  
私の首を狙ってくる。  
首をつかまれた私は彼の  
なすがままになっている。  
「コラ、鼻を押さえるな！！」  
もういいかげんにしてほしい。

## 笑う猫

二十年ほど前のことだが  
嫁さんと通りを歩いていると  
丘の上にある禅寺から  
何か不思議な気配を感じた。  
見上げてみると  
その丘の中腹に一匹の猫がいて  
こちらをジッと見つめている。  
目を合わすと猫はニコッと笑った。  
体全体がふくよかで  
えらく品のある雉猫だった。  
その笑いも余裕を感じる笑いで  
猫アレルギーのうちの嫁さんも  
なぜかその猫は怖くなかったらしく  
ニコッと笑いを返していた。  
嫁さんはその時「あの猫  
あの禅寺で修行を積んで  
悟りを開いたのかもしれんね」  
と言っていた。

禅に「南泉斬猫」という  
坊さんが猫を斬る話がある。  
南泉というのは高僧で  
弟子たちに悟りを開かせるために  
猫を斬ったわけだが  
それと同時に猫にも  
悟りを与えたに違いない。  
おそらく猫はその瞬間に  
悟りを見たことだろう。  
そして安心を得たことだろう。

その猫を見て、ぼくはふと  
その話を思い出した。

笑う猫、実は斬られた猫の  
生まれ変わりだったのかもしれないな。  
いや案外、南泉の生まれ変わりかもしれぬ。  
喝！



## 深夜

「ニャ!？」  
「ニャ!？」  
「おまえは誰だ？」  
「おまえこそ誰だ？」  
「おれはおれだ。だからおれだ」  
「おれもおれだ。けどおまえではない」  
「わけわからん」  
「わけわからん」  
「おまえのにおいを嗅がせろ」  
「おまえこそにおいを嗅がせろ」  
「そこを嗅ぐんじゃない」  
「どこを嗅ごうと勝手だ」  
「フー」  
「フー」  
「このパンチを喰らってみろ」  
「カウンターでお返ししてやる」  
「フギャー」  
「フギャー」  
「あ、」  
「あ、」  
「人が来る」  
「人が来る」  
「とりあえず」  
「とりあえず」  
「逃げろ」  
「逃げろ」

## 猫の・・・

以前猫の交尾を見たことがある。  
近くの本屋まで歩いている時のこと  
ある民家の庭に何かを感じた。  
その感じのするほうに目をやると  
そこで猫がやってやられてやっていた。  
最初猫は気づかなかったようで  
必死にやってやられてやっていたが  
こちらの気配を感じたとたん  
急にやってやられてをやめた。  
その時の猫の表情が忘れられない。  
いかにも悔しそうな、いかにも  
不愉快そうな顔をしていた。  
何においても人間というのは  
気持ちのいい行為をする時は  
人目をはばかるものだが、猫は違う。  
いつでもどこでも本能の命ずるままに  
やってやられてやっている。  
とはいうものの、いっちょ前に  
迷惑だけは感じているようだ。  
「見世物じゃないぞ、どっか行け！」  
あの時、猫は目でそう言っていた。

## 猫の本能

1、

不意を突かれた時に猫は  
前に向かって脇目も振らずに  
ダッシュする。ダッシュする。  
それを見てぼくは、猫は  
後ろに進めない動物だと思った。  
よく車道に猫が転がっているのは  
その結果であって、きっとそれは  
猫の本能のなせる業なのだろう。

2、

家の前でたむろしていた猫の頭に  
黒い紙袋をかぶせたことがある。  
これもある意味  
不意を突かれた状態になるから  
ぼくはてっきり猫は本能に従って  
前にダッシュすると思っていた。  
ところがその猫は  
しばらくそこに立ちすくんだ後に  
不器用な後ずさりを始めたのだ。

これはどうしたことだろう。しばらく  
ぼくはそのことについて考えた。  
おそらくその猫は『あっ前が消えた。  
困ったことになった』と悩んだ末に  
『前がないなら後ろに行くしかない』  
ということになり、後ろに進んだのだ。  
—という結論に達した。きっとこれも  
猫の本能のなせる業なのだろう。

## 鳴き声

犬は常に一人称で宣言する。  
「我、主人の恩義に報わん」  
彼らは滑舌が悪いので  
人の耳には「ワン」と聞こえる。

猫は常に二人称で呼びかける。  
「汝、何ゆえに我を構うや」  
彼らはあまりに早口なので  
人の耳には「ニャー」と聞こえる。

鴉は常に三人称で明け暮れる。  
「彼、今まさに残飯を捨てん」  
彼らは語尾が曖昧なので  
人の耳には「カー」と聞こえる。

奥付



## チッチとミーコ

著者：皆岡樹史（みなおか たつし）

著者プロフィール：

- ・昭和 32 年 福岡県八幡市生まれ
- ・モットー：『人生万事大丈夫！』
- ・趣味：作詞、作曲、弾き語り。
- ・影響を受けた人：一遍，盤珪，高村光太郎，中原中也，ボブ・ディラン，吉田拓郎
- ・影響を受けた書物：「老子」「臨濟録」「日本靈異記」「徒然草」「延命十句観音経靈驗記」
- ・影響を受けたマンガ：「あしたのジョー」「人間交差点」「シュマリ」
- ・ブログ：[\[https://detan.club/\]](https://detan.club/)

電子書籍プラットフォーム：ブクログのパプー (<https://puboo.jp/>)

運営会社：株式会社ブクログ

---

チッチとミーコ

---

著 皆岡 樹史

制作 Puboo  
発行所 デザインエッグ株式会社

---